山田風太郎「恋の奇蹟屋」論

安蒜貴子

1. はじめに

「恋の奇蹟屋」は、昭和二十四年十二月に雑誌「富士」に掲載された作品である。作者は、当時二十七歳で、同年二月に、「眼中の悪魔」で日本探偵作家クラブ短篇賞を受賞し、本格的な作家活動に入ると共に、三月には東京医学専門学校を卒業し四月よりインターンとなる。

作品の中心には、徳川幕府により弾圧される切支丹の姿があるが、このような切支丹物執筆への動きは、同年一月から始まっている。後に「戦中派動乱日記」[注1]として刊行される、当時の作者の日記には、昭和二十四年一月十三日付で、〈小説「黴毒伝来記」着想。（キリスト教と共に――）GHQへの挑戦。〉とあり、作者の作品群の中で最初に登場する切支丹物である「黴毒伝来記」（後の「スピロヘータ氏来朝記」）が、この頃に構想されたことがわかる。

その約二ヶ月後、「スピロヘータ氏来朝記」ならびに新たに着想した「邪宗門仏」の二作品執筆の参考資料とするため、作者は、数十冊程度の本を通読しており、前述した日記には、書名まで正確に記されている。それらの本は、切支丹研究そのものがまだ少ない時代の中で、切支丹[注2]に関する書物から、日欧通交史や医学史[注4]までと多岐の分野にわたった信用に足る書物である。[注3]作者が作品執筆のため、資料を選別し、目を通していることがうかがえる。また、この資料採集と執筆の間には、全く間がなく、どちらの作品もすぐに執筆を行っている。

そして、その翌月。ここでは新たな参考資料を探し求めること無しに、「恋の奇蹟屋」を執筆するのである。三作に続いてキリスト教を題材にとった作品、『山屋敷秘図』が執筆されるのが、それから約一年後であることを考えれば、キリスト教へ向けられた興味は、本作をおいて、いったん区切りを迎えたと考えられる。

もちろん『山屋敷秘図』に代表されるように、「恋の奇蹟屋」以降も、作中人物の一人として切支丹が登場するような作品は時折現れる。また、弾圧された切支丹とは異なるが、舞台が教会であったり、クリスチャンが現れたりする作品も多く見受けられ、作者のキリスト教への興味は、以後も続いていく流れであるといえるだろう。

初期の風太郎作品群は、自らの作品のスタイルを模索するかのように多岐に渡るものである。時代背景だけを例にあげれば、時代物から同時

代、また時代を特定できないようなものまで様々である。そういった試みの中で、キリスト教という題材に目をつけ、切支丹物を執筆したということは、作者の中で、切支丹を通してこそ語ることのできる何かがあったからではないだろうか。本論では、連続執筆された三作品のうち、区切りの作品にあたる「恋の奇蹟屋」から、切支丹という存在から作者が描き出そうとしたものを考えていきたい。

「恋の奇蹟屋」に登場する切支丹は、太兵衛という醜い男である。作品は、踏み絵の踏み方に躊躇があった〈わたくし〉という人物が、太兵衛について語っていく形をとっている。醜い容姿を持った太兵衛が切支丹となり、数々の奇蹟を起こす。だが、その奇蹟は、実はいかさまであり、更には切支丹への弾圧も重なって、最後には、太兵衛は処刑され、作品は終わる。

一般的な本作品の評価は、廣済堂文庫『売色使徒行伝』のあとがきに集約されているといってよい。

いかさまの奇蹟屋が最期に見せた奇蹟が、清らかな信仰ではなく、恋の妄執によるものだというところが、いかにもこの作者らしい。太兵衛は、処刑の際に、ある奇蹟を起こすのだが、この奇蹟を、〈清らかな信仰〉からではなく〈恋の妄執〉から起こしたものだとする捉え方である。作品の全てを〈恋の妄執〉としてまとめあげれば、切支丹であることが持つ意味は、消え失せてしまう。本論では、太兵衛が切支丹であったことに、焦点をあて、作品の最期に描かれているものを、改めて考察する。

2. 〈ころび〉として描かれる語り手〈わたくし〉

「恋の奇蹟屋」は、作者には珍しい〈わたくし〉による一人称での語りとなっており、大きく分けて五つの章からなる。それぞれの章には、「ころび前口上」「太兵衛発心の事」「天草の姫君」「天から落ちた話」「最後の奇蹟」とタイトルが付けられているが、最初の章題である「ころび前口上」は、初出時のみのもので、初出から六年後の昭和三十年、『蓮華盗賊』に収録された際に、章題は削除された。また、この最初の章題同様、「恋の奇蹟屋」という作品名そのものも、同時に改題され、「恋の」という部分が削除され、以後は、「奇蹟屋」となるのである。作品のタイトルから「恋」という言葉が消されると同時に、「ころび前口上」という章題が削除されていることを考えれば、既に、作品において、「恋」と「ころび」が無関係ではないといえるだろう。

冒頭、〈わたくし〉は、踏み絵の踏み方に躊躇があったと、役人の調べを受けている。〈わたくし〉は躊躇の理由を、〈あしうらにきりつと火のやうな痛みがはしつたやうに感じられたから〉と語るが、それは、〈わたくし〉の頭に、キリストが浮かんだからではない。〈わたくし〉は、自らが切支丹であることを完全に否定し、痛みを起こさせたものは、太兵衛という男が〈ふつと頭のなかを太兵衛の顔がとおり過ぎた〉せいだというのである。同時に〈わたくし〉は、太兵衛の死後、踏み絵を踏む前から、太兵衛のことが〈黒けぶりのやうに〉〈頭の中に〉〈ゆらめ〉き、〈ときどきひよんなはづみにこの黒けぶりが、すうつと胸を吹きすぎて、そのたびに身体ぢゆうが冷たくなるやうな思ひ〉を感じていたことを語っている。

しかし〈わたくし〉は、太兵衛の死後、太兵衛を不意に思い出す理由も、踏み絵を踏む際に躊躇した理由も、〈不思議〉であるとして、自ら語ることができない。むしろ、ことの顛末を役人に語ることによって、〈わたくし〉自身が理解しきれない部分を、〈わたくしに解き明かしていただきとう、こころからお願い申し上げる〉と、他者に委ねようとしている。このように〈わたくし〉は、語りの全てでありながら、語られることを全て理解しきれていない存在である。つまり、作品そのものが〈わたくし〉の理解の範囲外で起きている部分をもっていると明示されているのである。

〈わたくし〉の言葉だけを見るならば、〈わたくし〉とキリストとの間に結びつきは全くない。ここで、その〈わたくし〉の躊躇を〈ころび〉と呼ぶ章題に注目する。〈ころび〉とは、キリストを信仰していたものが、その信仰を捨て踏み絵を踏む行為を指す。〈ころび〉であるためには、初めにまずキリストを信仰しているということが必要なのである。〈わたくし〉を客観的に捉え、〈ころび〉と名づける第三者の視点が作品の章題には含まれているのである。とすれば、〈わたくし〉の認識を越えたところで、第三者的視点が〈わたくし〉を切支丹と認識しているといえるだろう。

切支丹を判別するための踏み絵を踏む際に、やはり切支丹であった太兵衛を思い出した、というだけでは、足の裏に痛みが走る理由としては、不十分である。踏み絵、つまり、キリストを踏む際に、足に痛みが走るということは、切支丹ではないことを宣言しながらも〈わたくし〉の肉体がどこかでキリストを踏むことを拒んでいることになる。そして、その時、〈わたくし〉の頭の中に、キリストではなく、太兵衛が浮かぶということは、〈わたくし〉の中で、キリストと太兵衛とは、どこかで深く結びついてしまう存在だといえる。それを第三者的視点がより明確に、〈ころび〉という言葉で表現しているのである。

以後、作品は回想形式となり、〈わたくし〉の視点から太兵衛という男が語られていく。

3. 太兵衛の帰依の理由

まず、語られるのは、太兵衛と〈わたくし〉が、生まれた土地を飛び出した、その理由である。太兵衛の家は、唐金鋳物を家業としており、〈唐津でも十本の指のうちにかぞへられるほど手堅い〉。一方、〈わたくし〉の家も、同じく唐金鋳物業であるが、こちらは、〈若いころからの放蕩三昧〉で〈店をつぶしかかってゐ〉る。同業者として見れば、〈わたくし〉は、太兵衛の立場を羨むべき立場である。だが、〈わたくし〉は、太兵衛をことごとくけなしていく。〈しっかり者〉の叔父の裏で、〈薄ばかみたいで、からきし意気地がなうて、いつもただ芋虫みたやうにうす暗い物陰をのそのそ這ひまわってゐる人間〉が太兵衛なのである。太兵衛が〈わたくし〉よりも金銭的に大きく優位に立っているにもかかわらず、ここまで劣等として語られるのは何故なのか。

〈わたくし〉は、それを太兵衛の〈面相〉のためだとする。〈青ンぶくれた顔に、唐がらしみたいな奇態な色をしたあぐら鼻、出ッ歯にすが目、そのうへ猫背に大足〉とことさらにその醜さを強調する〈わたくし〉にとって、太兵衛が〈薄ばか〉のように見え〈意気地〉がないことも、愚図になったのも、嫁にとろうと思った娘に断られ、〈ちやんとした家を飛び出させた〉のも、みんな〈あのひよんな顔のせゐ〉である。つまり、すべて、その肉体的特徴によるものだと考えているのだ。そして、この

肉体的特徴による劣等は、太兵衛が他者よりも金銭的に優位に立っても、解消されていない。つまり、肉体的特徴とは異なったところから発生する優等は、太兵衛の劣等を補うことができないと、〈わたくし〉は考えているのである。それは、太兵衛の劣等が、なにものとも代替することのできない太兵衛の肉体から起こることに起因する。死ぬまで失われることのない肉体は、太兵衛そのものとも呼ぶべきものである。〈わたくし〉は、肉体を、金銭や家柄などとは一線を画したものとして捉えている。〈わたくし〉が太兵衛の醜さを強調するのも、その劣等が唯一無二であり、しかも、補いようのないものであるためである。だからこそ、〈わたくし〉が、太兵衛の金を頼りにし旅に出ても、それによって太兵衛が〈わたくし〉よりも優位に立つことはない。つまり、〈わたくし〉にとって、金銭の有無によって起こる優劣は、少なくとも太兵衛との間には成立していないのである。

だからこそ、〈わたくし〉は、太兵衛の帰依の理由もまた、その肉体的特徴に関連づける。太兵衛と〈わたくし〉が島原で聞いた伴天連ズニガの説法は、

「聞かれい、皆の衆、――この世でいちばん弱い者――女、童、罪人、病人、片輪者なんぞこそ、いちばん天帝の御内証にかなふのぢや」

と、人々に訴えかける。太兵衛は、この言葉に〈随喜の涙を流〉し、帰依をしたと語られる。〈わたくし〉は、伴天連ズニガの言葉を〈片端ものこそ天帝に可愛がられる〉と言い換え、この言葉が〈世まよい言〉〈てにをはにあはぬこと〉としている。なぜ、〈わたくし〉は、ズニガの理屈を〈てにをはにあはぬこと〉と言い切ってしまうのだろうか。

〈わたくし〉のこの反発は、〈天帝〉が〈片端もの〉を〈可愛が〉る、という部分にあるわけではなく、〈片輪者こそ〉の〈こそ〉という部分にあるのではないか。つまり、神の愛がある対象に向けられることは、別段驚くべきことでもない。だが、それが、〈片端もの〉の方により強く向けられるという優越性に、〈わたくし〉は反応しているのではないだろうか。醜さを劣等と結びつけてきた〈わたくし〉にとって、その醜さが、優等の立場に逆転するという部分こそ、理解の範囲を越えたものなのだ。だが、だからこそ、〈わたくし〉は、太兵衛がその論理に〈随喜の涙を流〉したことにも理由付けをすることができる。「芋虫」と呼ばれることが〈まだ口のやさしい方〉であるくらいの醜さを持ち、その醜さを劣等の根拠として抱え続けてきた太兵衛が、ようやくその根拠を優等として捉えられるようになったという解釈である。

肉体的特徴からくる劣等は、肉体を抱え続けている限り、他と代替することはできないものであった。とすれば、肉体的特徴そのものを他者に優等として捉えてもらうことが、その劣等からの解放となる。実際、〈ほとほと感服して〉帰依した以降の太兵衛は、今までの様子からは想像もつかない勢いで説法を始める。その姿は、〈芋虫頭をふりたてふりたて、出ッ歯から唾をはねとばしながら〉と、やはり〈わたくし〉に醜くうつる。だが、勢いだけは、〈陰ぼし胡瓜〉の印象が消えており、太兵衛の劣等は、肉体の醜さを未だ感じさせながらも、消えていることがわかる。

4. 最初の奇蹟

自信をつけ、信者達の前で説法をするまでになった太兵衛だが、そんな中で、太兵衛は、一つの奇蹟を起こす。島原の大地震の日、いつものように説法をしていた太兵衛が〈片手を天にあげ〉〈わめいたとたん〉

〈背後に、蒼白く光る丘の土が、かつと縦横十文字に地割れして、まるで天から降った巨きな十字架のやうに見えた〉のである。

厳密には、〈わたくし〉は、太兵衛の起こした様々な奇蹟の中で、〈ほんとう〉だったのは〈最後の奇蹟だけ〉と語っているので、〈わたくし〉にとって、この出来事は奇蹟には数えられていないともいえる。それでも、〈わたくし〉自身、この時点での心境を、〈この世のものならぬ威厳、神々しさに打たれ〉たと語るし、この時、〈わたくし〉は、この太兵衛の前に〈思はず〉〈ひれ伏〉している。この〈奇蹟〉は、この後、太兵衛と〈わたくし〉が共謀して起していく数々の贋の〈奇蹟〉とは一線を画しているといえるのである。また、信者達にとっては、疑いもなく〈奇蹟〉として認識され、また、そうみなされたことが、少なからず太兵衛に変化を与えたことも事実である。

また、それ以上に、ここには、もう一点、注目すべきことがある。それは、〈わたくし〉の語りの中から初めて太兵衛の醜さが消えているということである。地震の際の太兵衛は、〈天に逆立つ髪、爛々と輝く瞳〉をしていると語られる。〈わたくし〉は、このように髪や瞳の様子を語り確かに太兵衛を観察しているにもかかわらず、その醜さにはまったく触れていない。

ここで、そもそも〈わたくし〉にとっての美醜とは何であったのかを確認しておく。太兵衛をことさらに醜く語り、その醜さが、太兵衛自身の劣等性となっていたと考える〈わたくし〉にとって、醜いということは、生きていくうえで不都合を起こす要素であるといえる。嫁をとることもできず、世間から後ろ指をさされる、という太兵衛に向けられる視線は、すべて社会の中で、その醜さが呼び起こすものである。醜い姿そのものよりも、それによって引き起こされる社会からの視線が〈わたくし〉にとっては問題なのである。とすれば、醜さや美しさが意識されるのは、あくまでも正常に社会生活が行われている状況でのことにすぎないといえる。地震という特別な状況の中で、他人の美醜を気にかける余裕を失った社会の中では、〈わたくし〉にとってもまた、太兵衛の醜さは意識されないものとなったのである。

〈わたくし〉と太兵衛の間にあった醜さによる優越は消え去り、〈のそのそと這いまわって〉生きてきた太兵衛こそが〈片手を空にあげたまま、すツくと立つて、身ゆるぎもせず〉にいる。そして、それと逆転するように、これまで見おろしてきた〈わたくし〉が、〈ひれ伏〉しているのである。

醜さが消えた太兵衛に、さらに、神々しさが付されたことには、この〈ひれ伏〉す〈わたくし〉と、〈すツくと立〉つ太兵衛という形が関わっているといえる。これは、信者達にも同様であり、太兵衛が他の信者達と同様に、地震の際に〈草の根をつかみしめて〉いたのでは、太兵衛の〈奇蹟〉にはならなかっただろう。太兵衛が立っているからこそ、太兵衛は地震を起こした側の人間であり、神の力を借りることのできる人間になったのである。

地震という天災は、地を揺るがせ、人々をうろたえさせ、〈草の根をつかみしめ〉地に這わせた。この時、信者も〈わたくし〉も、通常のように立っていることは不可能となる。そんな中、その場に立ち続けた太兵衛は、優等性を肉体で表現してしまったといえるのではないだろうか。優位に立つということは、見上げられることであり、劣等であることは見上げることである。この時、人々は太兵衛を見上げずにはいられなかった。そして、このように体現された優劣性の前では、通常の社会で行われる美醜によって起きる優劣性は無意味だったのではないだろうか。

ここに太兵衛の優等性を見た信者達は、この奇蹟の後、太兵衛を優れた修道士と見るようになる。ただ、その優等性とは、太兵衛が、自分達には無い力を持っているということに他ならない。信者達がこれ以降も太兵衛を、自分達よりも優れたものと見なし続けることから考えれば、作品に登場する切支丹達にとっての神とは、強大な力の持ち主であり、それ故に彼らは神を信仰すると考えられる。

一方で、〈わたくし〉の場合は、太兵衛の顔に、次の瞬間に浮かんだ〈翳みたいなうす笑ひ〉を目撃する。それに合わせて、さらにこの時の太兵衛が気絶していたことを知った〈わたくし〉は、この出来事を〈奇特〉ではなかったと理解し直す。つまり、地震は、ただの〈時のめぐりあわせ〉であり、そして、〈うす笑ひ〉の原因を、人々が自分にひれ伏す初めての体験と位置づけることで、〈人並みの欲心〉という、精神的な優位性を得た喜びへと結びつけていくのである。

気絶していた太兵衛と、うろたえた信者との間で行われたのは、〈わたくし〉がこれまで目にしてきた、優等性の逆転であり、人々が太兵衛にひれ伏すという出来事だった。太兵衛が無意識であると同時に、信者達が地震の中で行った〈草の根をつか〉むという行為もおそらく無意識のうちであり、この場の光景は、無意識の中で作り上げられた光景だといえる。

肉体自体が作り上げる優劣関係は、その美醜に由来すると考えてきた〈わたくし〉ではあったが、ここでは、その根拠ともいえる太兵衛と〈わたくし〉自身の関係が、美醜をも無意味にしてしまう新たな肉体による優劣関係、つまり、ひれふす劣の肉体と、ひれふされる優の肉体とを、体現したのである。もちろん、これによって〈わたくし〉の持つ美醜と優劣との関係が完全に消え失せたわけではない。だが、ここには、それが消え失せる一つの可能性が描かれているのである。

5. 姫君の存在

太兵衛の大地震での奇蹟は、偶然であったにもかかわらず、〈奇特〉と騒がれる。その中で、太兵衛は、〈ひとりかふたりの信者の病気を祈祷でなほ〉す。この出来事もまた、〈わたくし〉にとっては、〈調子づいてきたときには奇態なもの〉というだけで、奇蹟とは考えられていない。太兵衛の噂は更に広まり、天草の城に呼ばれ、不知火姫に出会う。その後の太兵衛が、姫を切支丹にしようと〈何かに憑かれた〉ようであったことを〈わたくし〉は語る。

以後、太兵衛は、〈いざりの男を歩かせ〉たり〈ゆきだおれの中風の老人をもとの身体にもどし〉たりと、様々な奇蹟を起こしていく。そして、再び不知火姫の前で〈海を歩んでわたる〉という奇蹟を起こしてみせるのである。

だが、これらの奇蹟は、〈わたくし〉と太兵衛によって仕組まれた奇蹟にすぎない。〈わたくし〉は、偽の奇蹟を起こしてまで、不知火姫を切支丹にしようとした太兵衛に、〈伝道の執念、ひたむきな信仰〉、そして〈修羅の妄執〉を見ている。

姫を切支丹にするには、キリストの力を誇り、見せつけなければならず、そのために、偽の奇蹟を起こすことを思いついたということである。だが、そのように執念を燃やす姿と共に、〈わたくし〉は、太兵衛が〈ぐつたりと壁なんぞにもたれて、かなしみにあふれるやうな姿を見せる〉姿を目撃している。しかし、その〈かなしみ〉の理由を私は語らない。とすればここには〈わたくし〉の理解できない太兵衛があらわれて

いるのではないか。〈わたくし〉のような考えでは、この時の太兵衛の〈かなしみ〉は理解できないのである。

では、この〈かなしみ〉とは、何によって起こっているのだろう。〈わたくし〉が語るように、〈暗い物陰を這い回〉るような太兵衛が、〈信者どもに説法する〉存在へと変化したことは確実である。とすれば、ズニガの教えが、太兵衛の変化のきっかけとなったということまでは、〈わたくし〉の理解は正しいといえるだろう。

ただ、〈わたくし〉は、太兵衛の劣等性を取り上げ、「片輪者なんぞこそ、いちばん天帝の御内証にかなうのぢや」というズニガの言葉の〈こそ〉の部分に焦点をあてていた。劣等性からの解放が、太兵衛のきっかけの理由とするのである。しかし、それでは、太兵衛の〈かなしみ〉を理解することはできない。

とすれば、太兵衛の〈かなしみ〉の理由は、ズニガの言葉の中で〈わたくし〉が見過ごしてきた部分にあるのではないだろうか。それが、「天帝の御内証にかなう」つまり愛されることだったのではないか。

信仰が太兵衛に与えたものが、価値観の逆転や代替などと〈わたくし〉が考えてきた優劣性にあるのではなく、愛されるということだったとするならば、太兵衛の求めた神の姿とは「愛する神」であったはずである。太兵衛は、醜さを優位にしたのではなく、醜さを愛してくれる存在としてのキリストにめぐりあったのだ。作品内の人間社会の中では、〈わたくし〉に代表されるように、美醜そのものが非常に重要視されている。人間の中にあっては決して人には愛されないほどの醜さを持つ太兵衛をも愛する存在は、人外の存在である神よりほかになかったのである。

だが、奇蹟を起こすことであらわれてくるのは、そういった神の姿ではなかった。注目されてしまうのは、奇蹟という、起こり得ない出来事を起こすことができる力である。太兵衛は、偽の奇蹟を起こすことによって、愛する存在としての神ではなく、強大な力を持った存在としての神のみが、注目されていくことに〈かなしみ〉を感じていたのではないか。それは、自らの帰依の理由である、愛されるということから、神がかけ離れていくことである。太兵衛の〈奇蹟〉によって、神は、むしろ、人間にできないことができるもの、人間よりも優位に立つものという優劣性の中で人間との関わり合いをもつ存在となってしまった。太兵衛の〈奇蹟〉を見て、帰依をする人々は、醜い肉体をも愛する神ではなく、強大な力をもった神を崇めるのであり、それは太兵衛が本当に布教した神ではなかったはずである。愛する神ではなく、強大な力の持ち主としての神しか伝道できないことに対する悲しみが、太兵衛の涙には、あったのだ。

偽の奇蹟を繰り返した太兵衛だが、〈天より星を降らせ〉ようとした奇蹟は、失敗に終わる。ちょうど、同日、お上による、切支丹の〈いっせい召捕りの御布令〉が島原にまわって来、太兵衛は、ズニガや信者達と共に、火あぶりとなる。そして、火あぶりの後に、〈わたくし〉が唯一本当とする、太兵衛の最期の奇蹟が起こるのである。

6. 最後の奇蹟

〈十日ののち〉、〈天草のある丘〉で、太兵衛とズニガを含めた十三人の〈火あぶり〉が行われる。そもそも、太兵衛達は、なぜ火あぶりという形で命を断たれるのか。〈わたくし〉は、その際の縄にゆるみがあることも含め、その理由を以下のように語っている。

御成敗の邪宗門どもが、のた打ちまはる最後の苦患をいよいよ大き

くして、他の見せしめにしようとなさるありがたいお上の御仁慈によるものでございます。

〈見せしめ〉にするということは、お上がキリスト以上の力を持っているという証明をし、それを見ている人間にわからせようとしているといえるだろう。一方でズニガ自身も、お上よりもキリストの方がより巨大な力を持つことを証明しようとする。ズニガは火あぶりの際に、〈悪しきこの国に永遠の火を降らせたまえ〉と叫ぶが、これは、火あぶりの火を越えた、それ以上に強大な神の力をお上に見せつけようとするものである。つまり、この場は、キリストとお上同士の力の見せつけあいだといえる。

天草で〈奇特〉を起こして見せてきた神の力は偉大である。しかし、それ以上にその神を信仰するものを〈火あぶり〉にして見せるお上の力は更に強大だ。それならば、〈奇特〉を起こす神が、お上を超える強大な力を更に見せつければよい。このように、最後に神の力を求めるズニガと、力を見せつけようとするお上との間には、より強大な力を求める争いが起こっているといえる。

また、それを見ている人々も、火あぶりになるため、処刑場へひかれていく太兵衛の〈ひどくしょんぼりして〉〈昔のふぬけの芋虫男〉に戻ったかのような様子を笑い、神の力をお上に見せつけようとするズニガに、恐怖を感じていることから、人々にとっての神もまた、巨大な力を持った存在であるといえる。

そして、それは、太兵衛との〈信仰〉の差をしめしてもいる。物語の中で太兵衛は常に、信仰と結びついた熱心な伝道士という存在だった。そして、その熱心な伝道士である太兵衛の姿は、処刑寸前にまで、

「神父さま、かんべんして下され！　わたくしの罪を、天帝様にとりなして下され！　忘れずにわたくしもどうぞ天国へつれていって下され」

とズニガに〈ぺこぺこと頭を下げる〉所にも現れている。

更に、ここにもう一人、強大な力同士の見せつけ合いに〈信仰〉という意味をもたせない人物がいる。それが不知火姫である。〈わたくし〉は、ここではじめて、不知火姫を目撃する。そして、その美しさは、〈地上のもの〉ではないとしている。不知火姫は、〈ちょうど、あの海をあゆみわたる修道士、天からくだる聖霊の星を御覧においで遊ばしたと同じように〉火あぶりを見に来ていると、〈わたくし〉は語り、それを皮肉なこととらえている。不知火姫にとって、〈奇特〉を見ることも〈火あぶり〉を見ることも何ら変わりはないのだと〈わたくし〉は考えているのだ。不知火姫は、どちらが強いかに興味は無い。神の力が強大であるが故に信仰をしてきた信者達は、更なる強い力を見せ付けられれば、そちらになびくだろう。しかし、不知火姫は、信者達などのように、力の強大さそのものにひれ伏す存在ではなく、むしろ、強大な力を面白がる存在である。

ところが、〈火あぶり〉を眺めていた次の瞬間、そこからあらわれた〈まっくろなあやかし〉が〈しづしづとひとすじに歩んでいって、天草の姫君のおんまえにつくと、しばらく凝っとたたず〉み、崩れ落ちたのを見た時、不知火姫は、その姿に驚き、声をあげる。不知火姫の〈天真爛漫〉さは、〈奇特〉と〈火あぶり〉を同じように見届けた。つまり、強大な力にはひれ伏すことなく見届けた。だが、〈まっくろなあやかし〉の前に、不知火姫は驚愕する。この〈あやかし〉は、不知火姫が、ただただ面白がっていた力とは全く異質の〈奇蹟〉を、見せたのである。これが、〈わたくし〉が、唯一〈ほんとう〉だとする奇蹟である。

では、その〈くろいあやかし〉とはいったい何だろうか。〈わたくし〉は、この人外の〈くろい炭の化け物〉を、はじめは太兵衛とは考えていない。後になって、この〈化け物〉が太兵衛であることを改めて語り直す。

それは、その〈くろい炭の化け物〉が、見知った〈のろのろとした猫背の格好〉であったことで、決定づけられる。と同時に、太兵衛と認識されるようになった〈あやかし〉は、姫君の前に〈さも恥づかしげにうづくまり、そのおみあしに口をつけるやうなすがた〉を見せる。そこで私は、それまでの太兵衛の行動を、不知火姫に〈煩悩の炎をもやしていた〉ためと理解したのである。つまり、人外のものを、太兵衛と呼ぶことで、その人外のものが美しい女性の前にひざまずく事を、恋だと解釈し、太兵衛の恋物語を作りあげたのだ。

この時、〈わたくし〉の中からは、これまでの〈信仰〉という言葉は全く消えうせ、今までの〈執心〉もただ恋として、説明される。〈わたくし〉が、姫への執心を〈恋〉と決定づける要素の一つには、姫の美しさがあげられるだろう。〈月輪が芙蓉の花のやうに臈たけたおん顔ばせ、つゆもしたたるばかりの黒髪、たくまづしてこぼれるおんあどけなさ〉と、〈わたくし〉は、姫の美を詳細に語る。そして、それが〈地上のものではござりません〉とも言うのである。この場合、姫は、天上、つまり、〈わたくし〉が見上げる存在という認識になる。〈わたくし〉の中で、桁はずれた美は、人外を意識させるものとなっている。〈わたくし〉の中にある、肉体の美醜優劣性の究極の形が、桁はずれた美が桁はずれの優等の存在におかれる形だったといえる。不知火姫の美は、太兵衛をはじめ全ての人々を、その目の前にひざまずかせる力を充分に持っていると〈わたくし〉は考える。

一方で、太兵衛が、その肉体的特徴を失ってから、不知火姫の前にうずくまるまでの間、〈わたくし〉はそれを、太兵衛と認識していない。それは、なぜだろうか。

太兵衛が処刑されるのは、先ほども見たように、お上と神との力の見せ付けあいの場である。そんな中、お上が焼き尽くそうとしたものの中から〈くろいあやかし〉が現れ出ることは、お上に屈しない一つの存在が現れたこととなる。そして、この場が、力と力の見せ付けあいの場だからこそ、そのようにお上の力に屈しないものは、お上を上回る強大な力を見せ付けるはずでもある。ところが、その〈くろいあやかし〉は、〈ふらふらと風に吹かれてただようて〉いるばかりだ。島原の大地震の際の〈片手を空にあげたまま、すツくと立つて、身ゆるぎもせず〉にいる太兵衛の姿を思い起こせば、この〈ただようて〉いるという様子が、どれほど強大な力からかけ離れているかわかるだろう。だから、それを見ている人々も、ひれ伏すこともできずにただただ〈息をのんだまま〉見ていることしかできないのだ。

更に、遂には、〈あやかし〉は、不知火姫、つまり、力の見せつけ合いとは無関係の存在の前にひれ伏してしまう。〈わたくし〉にとっても、おそらく周囲の人々にとっても、ひれ伏される側にいるべきである強大な力の持ち主は、ひれ伏されることではなく、自らひれ伏すことを選んだのだ。

〈わたくし〉は、この事態を理解できず、それ故、ひれ伏し愛す姿を、恋の姿ととらえることしかできなかった。それは、醜いものが美しいものへ敗北した姿と言い換えることができる。〈わたくし〉の中では、やはり、ひれ伏す者とひれ伏される者の間には、ある力関係が働いてしまうのだ。自らも体感した美の力によって、〈あやかし〉は、不知火姫に

敗北した。その時、〈わたくし〉の中では、これまでの太兵衛の行為全てが信仰ではなく、不知火姫への恋から起こっていたものだと理解される。

〈わたくし〉にとって、太兵衛の〈執心〉は、美に敗北しひれ伏すか、奇蹟を起こして優等に立ちひれ伏されるかの二者択一の答えしかもたないものだといえるだろう。強大な力を持ち、人々にひれ伏される存在である信仰の対象か、美しいものにひれ伏す恋か。〈わたくし〉にとって、恋か信仰かの決断は、その姿がひれ伏される側にあるか、ひれ伏す側にあるかに関連している。だからこそ、その狭間にあった〈ただよう〉〈黒い化け物〉を、〈わたくし〉は、太兵衛として認識できない。

燃え尽きた肉体は、人間でありながら、特定の誰かではないものといえる。それは、通常の社会から逸脱した存在である。そして、その肉体が、語り手である〈わたくし〉がそれまでの理解していた信仰の姿では語りきれない行動を起こした。その存在を語りようがなくなった〈わたくし〉は、それを太兵衛と、よく知る人間の名で呼び変えることで、そこに新たに恋の物語を作りあげた。〈わたくし〉が、〈あやかし〉のひれ伏す姿に理由をつけるとしたら、それは恋と呼ぶ、美への敗北しかないのである。そうすることで〈わたくし〉は、理解不能の存在を、理解の範疇で語ろうとした。だが、その狭間にある、名付けようもない肉体、〈くろいあやかし〉だけは、説明することはできない。〈わたくし〉は、その存在の正体を知ろうと、役人に〈いったいどういう仔細かわたくしに解き明かして〉もらいたいと冒頭で願いながらも、その語りを〈憐れな、可笑しい芋虫男の、恐ろしい恋の話と申しますのは、これだけでございます。〉と、しめくくる。

愛を求める信仰が恋だったと語られ、作品は、幕を閉じてしまうのである。この時、冒頭の〈わたくし〉の〈痛み〉は、いったん、忘れ去られてしまう。〈わたくし〉の〈痛み〉は、再びあらわれて詳しく提示されることがないのだ。

〈まっくろなあやかし〉があることで、作品には、〈わたくし〉の理解を超えた存在が生まれた。そして、それは、冒頭で〈わたくし〉が踏み絵を踏む際に、〈あしうらにきりつと火のような痛み〉が走り、同時に太兵衛の顔を思い出したことを、〈不思議〉だとしか言い表すことができないことと深く結びついている。

〈まっくろなあやかし〉が見せた、説明できない〈奇蹟〉は、人間同士による力の優劣の競い合いを超越した〈奇蹟〉であり、それは、肉体がひれ伏す、という形であらわれてきた。とすれば、そこにあるものこそが、作品内で〈わたくし〉によって語られ、また人々に信仰される神とは別種の、新たな人外の存在の形であったと考える。そして、その存在が、〈わたくし〉の肉体に残り続け、踏み絵を踏ませなかったといえるのではないだろうか。

7. おわりに

〈わたくし〉が目撃しながらも語ることができなかったもの。本作品では、それは、ある人外の存在であるということが提示されるにすぎない。

作者は、戦中を描いた他作品の中で、敗戦体験が、信じていたもの全てが覆された経験であり、その後に大きな虚無が訪れたとしている。そういった虚無感の中でも、新たに信じるに足るものを描くことは、人外の存在をもってでしか、叶わなかったのではないか。そして、この世の

力関係の外側に逸脱したものを描こうとした時、神のイメージが呼び寄せられたと考える。そして、その姿は、いったんは容認されていた信仰を覆される、という切支丹物を描くことで、より鮮明に現れたといえる。お上と修道士の力の争いを越えた所に存在する人外の存在である〈あやかし〉は、〈わたくし〉の語りによっては、その詳細を描ききることはできなかった。そして、だからこそ、作品の言葉の範囲を超えた所に位置することができるのである。

「恋の奇蹟屋」を一読した際には、作品の最後に〈憐れな、可笑しい芋虫男の、恐ろしい恋の話〉とあるように、〈恋〉の物語であることが印象づけられる。だが、改めて冒頭に戻ってみれば、そこには、〈シモン太兵衛の最期にまつはる不可思議な物語り〉と、太兵衛の最期を理解しきれない〈わたくし〉の姿が確かに描かれている。とすれば、〈わたくし〉は、作品を語っていくうちに、〈不可思議〉さを、〈恋〉の物語として、作り上げていったといえるだろう。

だが、その中においてもやはり、〈まつくろなあやかし〉は、語りきることができないままである。〈まつくろなあやかし〉は、踏み絵から連想される、冒頭の〈信仰〉の物語としては語れない。また、〈恋〉の物語と作り替えてみても語ることができない。ならば、〈まつくろなあやかし〉とは、〈信仰〉とも〈恋〉とも違うものというよりない。それは、「恋の奇蹟屋」と、〈恋〉と〈奇蹟〉が連立する作品名にもよくあらわれている。

しかし、「恋の奇蹟屋」は、六年後の昭和三十年には、「恋」と「ころび」を削除され、「奇蹟屋」となってしまう。初出時に、作者が強く浮かび上がらせた「恋」と「ころび」は、なぜ消えてしまったのか。「恋」か「信仰」か、と二者を選択しようとすることが逆に、背後に見えてくる人外の存在を浮き彫りにするのなら、「恋」と「信仰」を削除された作品からは、人外の気配は希薄となっていくのではないだろうか。

そして、そこには、昭和三十年に入ってからの、作者に何らかの転換があることを意味していると思われるが、それについては別稿を記したい。

注

1. 『戦中派動乱日記』(平成十六年・小学館)
2. 『切支丹鮮血遺書』松崎実(昭和一年・改造社)など
3. 『日欧通交史』幸田成友(昭和十七年・岩波書店)など
4. 『日本医学史』富士川游(明治三十七年・裳華房)など
5. 『売色使徒行伝』(平成八年・廣済堂出版)